



ユハイム

神戸のサッカー

1982 10月号

発行所 神戸市サッカー協会
神戸市中央区八幡通2-1-10
三木記念神戸市立スポーツ会館内
〒651 ☎ (078) 232-0753
発行人および編集人 一北 四郎
神戸市灘区上野通6丁目3-12
〒657 ☎ (078) 861-3100

毎月1回10日発行 購読料1部50円



スーパー・サッカー 神戸で2試合

恒例になった富士ゼロックス社協賛のスーパー・サッカーは、11月3日、7日、11日の3日間、大宮、神戸、東京の3会場で行われる。スーパー・サッカーは今年で4回目だが、これまで同大会には文字通り世界のスーパースターたちが来日し、日本のサッカーファンを沸かせた。



＜NASLで無敵を誇るスーパー・スター軍団「コスモス」＞

森・全日本——スター軍団「コスモス」とテスト・マッチ

アジア大会壮行試合

「皇帝」ベッケンバウアーが特別参加！日本のファンへ最後の雄姿

今回来日するのは、北アメリカ・リーグの無敵チーム、コスモスと、ロシア共和国選抜。ことに今回は6月に現役を引退したばかりの西ドイツの皇帝フランツ・ベッケンバウアーがコスモスの一員として特別参加することが決まっております、われわれに最後の雄姿を見せてくれる。

また、今大会は11月中旬にインドのニューデリーで行われるアジア大会に参加する全日本チームの壮行試合も兼ねている。ロサンゼ

ルス・オリンピック出場をねらう全日本にとってはこのアジア大会で上位入ることを2年前から大きな目標としており、森孝慈監督、花岡英光コーチ率いる全日本が夏のヨーロッパ遠征でどう成長したか。新体制が「攻撃的サッカー」をめざしているだけにファンにとっては大変楽しみなシリーズである。

また、日本選抜は23歳以下の若手でチームを編成し、ロシア共和国選抜と対戦する。

ツッケンバウアーは新天地北米リーグのコスモス入りし、その年すぐにコスモスを北米リーグ・チャンピオンに導いてMVPに。'80年、再び西ドイツに帰り、ハンブルガーSVの一員として'82年、彼としては5回目のブンデスリーガ・チャンピオン・メダルを手にした。



＜'79年のスーパーサッカーより（写真提供 上野勝幸氏）＞

とき 11月7日(日)

12:30 日本選抜(23歳以下)
14:30 全日本代表

ところ 神戸市立中央球技場

対 ロシア共和国選抜
対 コスモス

チーム紹介……コスモス……

北米リーグ '82年シーズンは4月に始まり、今シーズンは14チームを3つのブロックに分けてのリーグ戦で、幕をあけてみると、スター軍団のコスモスが圧倒的なプレーぶりです。が、この評価を受けた。ジョルジョ・キナリヤ主将が依然快調にゴールを決め、ニースケンス(オランダ)、ボギチェビッチ(ユーゴ)アルベルト(ブラジル)らのベテランにロメロ、カバニャス(パラグアイ)の若手が参加して、他チームにつけ入るすきを与えていない。さらに、ジェフ・ターガン、リック・デービス、デービッド・プルシッチ、チコ・ボルシャラの米国籍の若手が非常に伸びている。これに皇帝ベッケンバウアーが加われば向うところ敵なしといったところだ。

……ロシア共和国選抜……

ロシア共和国選抜チームはモスクワを除くソビエト連邦ロシア共和国の広大な地域の中から選抜された選手で編成され、日本サッカーともゆかりの深いチームである。というのも日ソスポーツ交流の一環として日本代表チームが、1963～68年の間にこのロシア共和国選抜と5試合を行ったからだ。当時の日本チ

ームといえば釜本、杉山の黄金コンビを擁したメキシコ五輪、銅メダルチームで、勝敗はロシア共和国選抜の4勝1分けと当時の日本代表を圧倒していただけに、その水準は相当に高いものと期待できる。



……選手紹介……

フランツ・ベッケンバウアー——120年の近代サッカーの歴史の中でも彼の名は、ひととき大きな文字で記される。ワールドカップ優勝、欧州選手権優勝、欧州最優秀選手など、ありとあらゆるタイトルを手にしたからではない。リベロというポジションのまったく新しいプレーを完成し、サッカーに新しい時代をもたらす先導者となったからだ。

1945年、西ドイツのミュンヘンで郵便局員の息子として生まれたベッケンバウアーは、地元のSC1906クラブでサッカーを始めるとたちまち頭角を現わし、バイエルン・ミュンヘンに入った。このクラブとともにベッケンバウアーは成長し、西ドイツユース代表から大人の代表チームへとスターへの階段を登りつめた。

'77年にバイエルン・ミュンヘンを離れたベ

応援を楽しもう！

スペイン・ワールドカップの模様はテレビで日本に紹介されたが、戦争とも思えるほどのあの激しい戦いはサポーターズの力がなくてはありえない。イタリアしかり、西ドイツしかり、ブラジルしかりである。その点神戸のファンは静かすぎる。あれでは選手も勇気がわいて来ない。旗を振り、ラッパを吹き、数万人が声をそろえて「ニッポン！チャ！チャ！チャ！」——サッカーのだいご味の半分はわれわれが作り出すものである。神戸中央球技場のスタンドが割れんばかりの応援で全日本をアジア大会へ送り出しましょう。

入 場 料	種 類	前 売	当 日
	S 席(指定)	3,000円	3,000円
	A 席(自由)	1,500円	2,000円
	B 席(立見)	800円	1,000円
	中高生券(B席)	500円	
	小学生券(B席)	300円	

切符は市内プレーガイド、サッカーショップ・オウビ、加茂、ヤノ運動具店、兵庫県サッカー協会が発売中。

第2回県クラブ・ジュニア選手権

尼崎FCが初優勝

新しい波が大会を盛り上げた

9月5日から始まった第2回兵庫県クラブ・ジュニア選手権大会(県協会主催)は9月26日に決勝戦を磯上球技場で、尼崎FCがPK戦で神戸FCジュニアを下して初優勝を飾った。

同大会は協会の第3種(中学生年齢)に加盟登録した県下クラブチームのナンバー・ワンを決める大会で、今年は6クラブが参加した。その中で神戸FCジュニアは3チームが参加したため計8チームとなり、4チームずつ2組に分けてリーグ戦を行い、その後同順位同士で順位決定戦を行った。

激戦の1組は上位3チームが同勝点で得失点差によって尼崎FCの1位が決まった。川辺郡から初参加の六瀬(むつせ)FCと竜野市の竜野ドッグズの2チームが大旋風を巻き起した。2組は神戸FC同士の対決で、cが2-1でaを破った。

▷決勝(9月26日、磯上)

尼崎FC 0 { 0-0 } 0 神戸FCジュニア・c

PK 3-1

両チームとも速攻を得意とし、激しい攻め合いは見えたが、力強い守備が単調な尼崎に対し、ドリブルから横へゆきぶる神戸がやや有利に展開したが、尼崎のシュートは鋭く神戸ゴールを脅かした。しかし、両チームのゴールキーパーのファインプレーで結局得点なく0-0で終了、PK戦に持ち込まれた。第1キッカーが外へはらず固くなった神戸に

対し、尼崎は思いきってキックし、全員が成功して3-1で勝った。

尼崎FCは家族の応援も多く、指導者の師田、前田、佐藤氏らの情熱に引っ張られガッツリと地域に根をおろした感じが、尼崎FCの優勝は非常に意義深いものがある。

▷3位決定戦(9月16日、六甲中)

六瀬FC 3 { 2-1 } 2 神戸FCジュニア・a

六瀬中学にサッカー部がないため、やむを得ず野球部などに籍を置く六瀬イレブンの「サッカーが出来るぞ」という喜びを見ただけで今大会は成功だった。キック・アンド・ラッシュ戦法でボールを恐れぬ姿勢はサッカーの原点を教えてくれた。

▷5、6位決定戦(9月26日、磯上)

竜野 4 { 1-1 } 1 竜野ドッグズ (川西)

竜野ドッグズは竜野西中学に在籍しているが、少年時代の仲間が再び集って心からサッカーを楽しんでいる姿は印象的だった。3年生が1年生を優しくリードしているチームの雰囲気は好感がもてた。

銀河少年団は昨年より数段進歩したサッカーをみせた。よく走り、助けあうサッカーは選手の自主性を最大限尊重している監督の山崎氏の努力の成果だ。

神戸FCは2年以下のメンバーを均等な力に3等分してチームを編成したため力が分散されたようだ。1年生の健闘が光ったがやは

り体力差は補えなかった。来年の巻き返しに期待したい。

尼崎ジュニアも地道に努力しているマナーのよい好チームだった。着実な歩みに期待したい。

大会中退場者が1人あった。審判の判定に不服を言ったためだが、早期治療も大切な教育手段である。うみはかくさず早目に外に出し、今後この大会を大きく育てる意味でやむを得なかったと思う。フェアプレーはサッカーの柱である。すべての指導者への警告として受けとめ少年サッカーを発展させたい。

来年度以降も継続してこの大会を行う予定です。参加希望クラブは兵庫県協会へサッカー協会の第3種登録を来年も行て下さい。参加チームが増えさらに盛大な大会になるよう願っています。なお、お問い合わせは遠慮なく県協会まで。(黒田)

第2回県クラブ・ジュニア選手権大会結果

▷1次リーグ

順位	第1組	尼崎FC	六瀬FC	竜野	神戸b	勝点	得失点差
1	尼崎FC	●	○	○	○	4	+3
2	六瀬FC	○	●	○	○	4	+2
3	竜野ドッグズ	○	○	●	○	4	+1
4	神戸FC・b	○	○	○	●	0	-6

順位	第2組	神戸c	神戸a	銀河	尼崎	勝点	得失点差
1	神戸FC・c	●	○	○	○	6	+13
2	神戸FC・a	○	●	○	○	4	+14
3	銀河少年団	○	○	●	○	2	-3
4	尼崎ジュニア	○	○	○	●	0	-24

7、8位決定戦はまだ行われていない。

最後によくがんばった選手達に心からの拍手を送ってやりたい。

徳島市招待少年大会結果(関係分)

順位	Cグループ	神戸	玉野	城東	八万	勝点	得失点差
1	神戸市選抜	●	○	○	○	4	+5
2	玉野少年団	○	●	○	○	4	+2
3	徳島城東	○	○	●	○	2	-2
4	徳島八万	○	○	○	●	2	-5

▷決勝トーナメント

FC町田(東京)	2	優勝 神戸市選抜
清水FC(静岡)	0	
松原FC(大阪)	0	
神戸市選抜(兵庫)	1	

原稿募集(記念品進呈)

月刊「神戸のサッカー」では原稿を募集しています。市内のサッカーを強化し、ますます普及発展させるためのちよとしたアイディア、あるいは当機関紙を読まれた感想など、何でもけっこうです。編集委員会審査し、採用された方には、神戸市協会のペナントをさしあげます。締め切りは11月末日です。

日本サッカーに

ルネサンスは起こるか?(2)

枚方FC 近江 達

日本の現実

さて、こうした世界情勢の中で、日本はどうであろうか?一見、盛大活発!わが大和民族は模倣の才に恵まれ、常に流行とともにあるから狭い国の中で世界のありとあらゆるスポーツが、1年中せわしなく行われ、オリンピックともなれば大変で、米、ソと並ぶ大役員団、大選手団が威風堂々行進し、これまた世界1の大記者団が随行して、メダルがとれないの、少ないのと大騒ぎ。その上、最近ではマラソン、ゴルフ、テニスなど、世界のトップクラスの来日が絶えない。1981年からは、なんとサッカーのクラブ世界1決定戦さえ東京で見られるようになった。有り難いことである。

まるで文化国家からスポーツ国家になったと錯覚しかねないほどの盛況だが、種あかしは先刻御承知。目ぼしいものは、市場拡大で



◀81年12月13日、東京国立代々木競技場で行われた、世界1決定戦(上野勝幸)の試合風景。

狙い、何だか抜け目なく金儲けに利用するエコノミック・アニマルが組んだ興行にすぎない(聞くとところによると、1982年ワールド・カップのスポンサーは世界中から10社に限定されるが、そのうちなんと4社が日本の会社で1社あたり30億円を支払うとか……)。

日本スポーツ界の実体はお粗末である。施設は乏しく、スポーツ行政は前向きに少し善処してくださるだけ。好意的な社会環境もほとんどない。

テレビ中継やスポーツ記事が大好きな大衆にしても、実のところ、大多数はスポーツにおける競技が好きなのではない。麻雀や競馬、競輪の興味というか、競争とか、一種の勝負事として、スポーツが好きなのことなのである(スポーツが国産であるが、わが国が激しい競争社会だということも手伝っているであろう)。

したがって、そんな大衆とその代弁者兼リーダーであるマスコミは、老若男女、年齢を問わず、すべての選手にひたすら勝利と優勝を求めてやまない。

ところが、そうして自他ともに躍起になって勝利を渴望し、闘志を競い猛訓練を重ねているにもかかわらず、わが国のレベルは国際的にみるといまだに低い。努力の割に成果が上がらず、能率の悪いことはなほだし。

もっとも、それなりに進歩はしている。だが、外国の進歩の方がめざましいため、どう

しても日本だけが取り残されていくようにみえてしまう。だから、かつて世界のトップクラスだったOBたちは、さかんに現役のふがいなさを嘆き切歯扼腕(やくわん)する。

同感できる点は少なくない。人一倍苦勞し、努力したOBを私は尊敬する。だが、それはそれとして、当時日本が強かったのは、残念ながら、外国が今ほど力を入れていなかった古き良き時代だったからでもある。

その証拠に、彼らが本腰を入れてみっちりやり出したらどうなるか。メダルがよい見本で、どうやら体操、柔道、バレーボールなどがあとに続きそうになってきた。

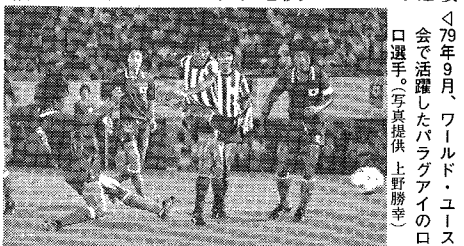
なにしろ相手のあることだ。懸命必死の努力必ずしも実るものにあらず。まして、相手は先天的な肉体的優位にあり、しかも国家社会の手厚い援助保護を受けている民族である。彼らにはまだまだ余力が残っているし、開発途上国にも優秀な素質をもちながら、まだ本式の軌道に乗っていない民族もいる。たとえば、水泳は黒人が未参加。サッカーにしても、アフリカが力をつけてきたらどうなるか……。

こうして冷静に眺めてみると、世間は「勝て、勝て」とやかましく言うけれども、素質、環境などすべての点で明らかに不利なわれわれの上に、将来、偶然でなく名実ともに勝利の日が訪れる可能性は、果たしてどの程度あり得るのだろうか?

多くの改良が今後なしとげられた場合でさえ、可能性は低いと言わざるを得ない。まして今までどおりでは無理だろう。

スポーツは勝負事に過ぎないのか?

首脳部もマスコミも、オリンピック予選のたびに、「今度はいけそうだ」といった意味のことをおっしゃるが、実のところ、こちらはもうウンザリしている。言わざるを得ない立場はわかる。しかし、世間の人々は権威に対してやたらヒステリックに噛みつくかと思えば、意外なほど素直で、「活字イコール真実か真理」と、いとも簡単に信じてしまうから困るのである。そんな取り繕いよりも、もうこの辺で「どうしても勝てない場合でもわれわれはスポーツをするのかどうか。するのなら、なぜするのか」と、これ以上はひけぬというギリギリの線まで後退して、それぞれ信念をハッキリさせ、腹を決めてかかる必要



◀79年9月、ワールド・ユース大会で活躍したバレークイーン・ロメオ選手(写真提供 上野勝幸)

があるのではなからうか。

簡単にいえば「弱くても、負けてばかりでも、君はスポーツを続けるか?」ということである。答えはいろいろあるだろう。

「いやだからやめる」「それでも好きだから続ける」

以前、「全日本クラスの一流選手になれないのならやめる。趣味として、なんていやだ」と言った少年がいた。その意気を杜とする

天才佐々木博和(現・松下電器)を生んだ枚方FCの創設者にして監督である近江達氏は技術や指導の第一人者であるばかりでなく、サッカーというスポーツの裏面にある文化背景をも深く探求している。その論旨は日本サッカー界、否、日本社会の弱点にまで筆鋒鋭く切り込み、本質に迫っており、信奉者も多い。今回のテーマは「日本サッカーにルネサンスは起こるか?」日本サッカーの発展のためにはルネサンスにも匹敵する人間性の解放が必要であると、喝破する。



◀国際女子サッカー大会。男性はまけの激しい中で彼女たちは楽しそうにプレーした。

方も多いだろうが、私は天の邪鬼で、「スポーツとは、勝利者、強者しか認めないようなものであってはならない」と頑固に信じ込んでいるので、「東大に入れないのなら勉強なんてするもんか」といった類の考え方は傲慢で鼻ももちならないほうである。「好きだから……」という答えがいい。

勝利か敗北かは、試合の結果、つまり、スポーツの結果にすぎない。スポーツで最も大切なものは、スポーツしているとき、つまり試合中のプレーの中にあるのだ。

真のスポーツ愛好者なら、そういう見方をしていると思う。少なくとも、そう言えば作文や建前や儀礼でなく、無理なく自然に心の底から共鳴してくれるにちがいない。

もっとも、サッカーブームを起こすには、よく言われるように、代表チームが強くなって勝つことが一番である。メキシコ・オリンピック銅メダル・チームのように、一握りの精鋭だけなら、強化策次第で好成績も期待できるし、もしそうになったら、ブームも起こるかもしれない。

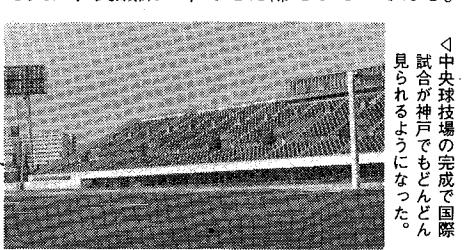
ただし、勝つことしか眼中になく、勝者、強者以外は無視するようなスポーツ観が斯界の骨格になっている限り、おそろく、それは一夜の打ち上げ花火で終わり、日本にサッカー愛好国という国際的評価が与えられる日は来ないであろう。

新種発生

日本サッカー界の停滞は随分以前から続いているので、今では、その原因や対策についての意見は出尽した感さえある。私もかつてそうした内容の拙文を発表したことがあるが、早いもので、あれからかなりの年月が流れ去った。

その間、当時私の言った「もっとボールを持たせて、少年たちの技術を高めよう」という主張だけは、程度はさまざまながら各地へ徐々に浸透していった。指導者たちが勝たいたためであるとともに、一種の進化というか自然現象ともいえるかもしれない。

だが、日本サッカーの体質改革など、もっと重大な提案の方は理解されず、絶対多数派の反感をかった。精神力や技術の不足は解っても、停滞の原因が根幹にあると見抜いている人は、良識派の中でさえ稀だったのである。



◀中央球技場の完成で国際試合が神戸でもとんとん見られるようになった。

明日の栄光を勝ちとれ!

▲80年代をリードする ヤンガー サッカーウェア



SOCCER WEAR, PANTS, STOCKING



markam
マーカム・サッカーシューズ

マーカム11 ケリー・レッド・ブルー・イエロー
・サイズ:18.0-28.0 標準小売価格 ¥4,300
マーカム22 ホワイト・ケリー
・サイズ:22.0-28.0 標準小売価格 ¥6,000
マーカム33 ホワイト
・サイズ:22.0-28.0 標準小売価格 ¥7,800



写真はマーカム11・ケリー

充実のモルテンTango
サッカー界の新しいスタンダード



モルテン工業株式会社
広島/東京/大阪/名古屋/福岡/札幌

市内の少年サッカーもますます盛んになる。昨年の神戸県ライオンズ杯より。



の次とする学校運動部のあり方とか、上下関係などにみられる封建的悪弊に対する彼らの拒否反応そのものは間違っていない。公平に見て、いかにスポーツに打ち込もうと、勉学優先が本来アマチュアのあるべき姿であろう。それ以上スポーツに専念したいものは、すでにセミプロ化している企業チームへ進むべきだ、という気がする。どちらにしても、年々変わっていく青少年気質、教育者の神通力

しかし、最近、そんなサッカー界を含むアマチュア・スポーツ界全体に注目すべき画期的現象が進行している。

それは、同好会やジョギング・ブームに代表される新種発生で、いわゆる「見るスポーツ」から「参加するスポーツ」への移行である。

とくに同好会は、従来のようなスポーツのためにすべてを犠牲にする学校運動部のあり方に反発して、あるいは、そこからはじき出されて生まれ、今も増えつつある。民間クラブもそれに似た部分をもっている。

かたや、勝つため高度化の必要から、ますますプロ化してゆく一流高校、大学や一流企業チーム。

かたや、決闘ではなく、あくまでスポーツを楽しむアマチュアたらんとする同好会。

かつて一色だったアマチュア・スポーツ界には、いわばプロとアマという両極へ向かう分化現象が自然発生し(?)目下進行中なのである。

「一色」といったのは、これまでわが国では、大相撲、プロ野球などを除けば、学校の体育の授業と運動部活動以外に本式のスポーツはなかったからである。

企業スポーツの社会人選手も体協ボス諸公にしても、すべてそのOBなので、旧来のアマチュア・スポーツはすべて学校スポーツとその延長で、総本山・体協加盟の各団体は由緒正しい学校運動部とOB一家によって独占運営されて今日にいたっているわけである。

欧州・南米の場合、国によって違いはあっても、大体クラブ主体なので学校スポーツの勢力は弱く、日本のようなケースはない。プロ、アマの区別も金銭面だけでなく、生活のために精進するのがプロ、本職や学業を妨げぬ範囲で趣味や余技として楽しむのがアマ、となっている。スポーツに対する姿勢や信念の違いは明解である。

その点、学校が手をひけばスポーツ界が崩壊する日本は特殊である。有史以来、関係者にとって、スポーツ界とは中体連・高体連などと、その延長の大学や社会人スポーツ界のことなのである。勉強は付け足しで(?)全力をあげて強化に専念する彼らが築きあげた王国では、血統書つきの自分たち以外は、氏素性も知れぬよきものにすぎない。

たとえば、大学の推薦入学は高校運動部に限られている。枚方FCのような民間クラブだと、たとえユース代表選手だろうと、ナショナル・トレセンだろうと、全然資格なし。推薦欄は空白のまま。もし入学、入社しても、紹介されるのは出身校で、クラブではない。

当然、体育会運動部の厳しさを嫌って、楽しむ同好会に集まる軟弱ぶりへの非難は激しく、「優秀な連中がほとんど運動部へ入らないと、大学運動部は昔のように強くなれない。大学が社会人を凌ぐようにならないと、日本は強くなれない」とよく言われる。

分極現象で欧米化へ進化?

しかしながら、好むと好まざるに関わりなく、時代は刻々と変わっていく。

彼らの軟弱さも、運動部の鍛えぬめかれた気力・体力の強さも、ともに事実だが、やはり学生・生徒は勉学が本業だから、学業さえ二

低下や選手の優先入学への反対運動、学生たちの功利的触角の鋭敏さなど、いろいろ考えていくと、彼らが企業チームか、さもなくば同好会という純粋アマを選び、プロともアマともつかぬ大学運動部が衰退していくのは、所詮時の流れというもので、立ち直りは期待しないほうがよからう。それに、国内での競争は関係なくとも、今後ますます進歩していく世界のスポーツ技術やレベルの高さを思うと、学校体育で高度化の要求に応じることは無理ではあるまいか。

といっても、格別気落ちするほどのことでもあるまい。たしかに、現在では大学スポーツの凋落にちがいないけれども、百年、二百年たって振り返ってみたら、こうした現象は、おそらく単なる衰弱退化ではなくて、日本スポーツ界から学校スポーツ・オンリーという



△いつになったら、日本から世界に通ずる選手が育ってくるのか……。写真提供 上野 勝幸

特殊性が薄れていって、欧州のブロと、曖昧なアマでない本当のアマチュアとに分化していく、自然淘汰を伴った、進化の一過程だった、ということになるのではなからうか。

誰のためのスポーツか?

ところで、スポーツとは一体どういうものなのか、アメリカ・スポーツの危機を指摘するJ・ミッチュナーはこう述べている。

「スポーツは社会の醜いものを超越し、人々が共感できるしっかりした理念をつねに志向すべきものである。

参加する者にとって、スポーツは楽しいものでなければならない。緊張から解放し、快い興奮を呼び起し、攻撃的感情のよい意味での排け口になる、いわば精神的浄化作用をもたらすものであり、同時に社会全体の健康を増進して大衆に娯楽を与えるものでなければならない。それが苦行になったときには、すで

に半分はスポーツではなくなってしまっているのだ。」

すばらしい説明である。その点、日本スポーツの現状はどうであろうか?

ずっと以前読んだ記事の中に、大変印象的

でいまだに覚えているのがある。アメリカのスミシング・クラブ育ちの日本人少女が初めて内地の合宿に参加したときの話しである。

毎日1万メートル前後泳ぐのだから、むろん楽とは言えない。だが、それにしても、どうも内地の選手達と自分とは違うようだ。そのうちに彼女は気づいた。

「私は自分のために泳ぐ。だから少しも辛くない。だのに皆さんはどうしてあんなにいやいや泳ぐのかしら?」

なるほど、言われてみれば全くその通りである。これは痛いところをつかれた。

昔から我々は、「スポーツとは鍛練修業であって、辛いものだ」という伝統と常識の中で育ち暮してきたので気がつかないけれども、一体、誰のために、何のために、なぜスポーツをやるのか?

これは改めて考えてみる必要がありそうである。あなたなら、どう答えるか? また少年たちは? これからの少年たちはどう答えるだろう?

むろん、国のため、学校のため、会社のため、自分のため、いろいろあってよい。どれが正しくて、どれが間違っているかはない。それはいいとして、こう仮定してみよう。

あなたが日本代表のような注目されている選手であって、記者会見に臨んだとする。そのときでも思ったとおりのことが話せるだろうか? とくに、自分のためにやるんだと思っているとき、果してそう答えられるだろうか?

我々は口が重い。本音と建前が違う。優等生的な型にはまった話しかしない。本心は別のことがとても多い、海外暮らしの日本人だから欧米人のように思ったとおりのハッキリ言えるのであって、内地人ならたとえ本人はそうであっても、いろいろ気をつけて、とてもそうは言えないものである。

風俗習慣の違いだ、と言ってしまえばそれまでである。しかし、それだけで済ませてきたことは間違いない。

我々の精神や心情の構造や活動には独特の複雑さ、曖昧さ、自閉的陰湿さがつきまとっている。欧米人に比べると、自分の考えや意思を率直に表現する技術が乏しく、力が弱い。もっている全才能を発揮し尽くすこともへたなようである。他人の表現伝達を受け取るのも感情的で理性的ではない。

スポーツマンにおいて精神がこの上もなく重要であることは、スポーツ関係者が伝統的に強調してきたとおりである。してみると、この大きな差異が彼らのスポーツに影響しないはずがない。現在の日本スポーツ界停滞にも必らず関係しているに違いない。技術差とか、体力差、根生、ファイトなどの問題よりも、もっともっと根本的なネックになっているのではなからうか。(つづく)



市内ミニ・サッカー大会には「母親」の部も登場した。(写真提供 黒田 和生)

サッカー

教え方 学び方 (9)

岩谷 俊夫

協力 毎日新聞社



フレイント

少年スクールの子にフレイント・プレーを教えると、相手がかわって(しり)を向けるので、おもしろがってそればかりやっている。ただでグーッとスライディングしたくなる。つまり、気合いである。ただそれは本気でやるつもりでなければ相手はひっかからない。プレーの型でいえば、右へ行くときみせかけて左。ダッシュするとみせかけて急ブレーキ。キックするとみせ

本気のウツけり

かけてのストップ。プレーひとつひとつが全部自然のフレイントであるといつてよい。サーの称号をうけた。つまりこわいプレーがない。選手がフレイント・プレーを身につけていないからだ」ということであつた。

それはボール・コントロールがうまくできない、という説で片づける人もある。しかし、幼い子らがフレイント・プレーをしているのを見たら「フレイント」はプレーが始まったときからある、と考え直す必要がありそう。つまり止まった状態でも、歩いてドリブルしているような未熟な段階でも、フレイントはフレイントなのである。フレイントとい

えば、ボールをまたいだり、腰をぐらぐらさせてストップしたり、ボールをはさんだりの一見高級に見えるプレーを指しているのではない。ひとこといえば、相手のおどかさくことである。相手のスピードを変えることである。つまり相手の戸惑わせることなのである。何もなくても気合い一つで

といつてもよい。下手な選手がいくら立ち止まって、フレイントらしきものをして、こちらがじつと構えておれば何の役にも立たない。ところが相手が音に聞く名選手なら、腰をビクつかせただけでグーッとスライディングしたくなる。つまり、気合いである。ただそれは本気でやるつもりでなければ相手はひっかからない。プレーの型でいえば、右へ行くときみせかけて左。ダッシュするとみせかけて急ブレーキ。キックするとみせ



フレイント

相手の考えていないことをやるのがフレイント。小さなおどかしのクセをつけることが肝心だ。相手をひっかけるおもしろさは最高。

試合にはいれば、とってつけたようなフレイント・プレーはしなくとも、自在にやれるようになる。いちいちボールをまたぐのをフレイント・プレーと考えているなら、スピーディーな攻撃にはいった際に味方全体のスピードを自分勝手なプレーで鈍らせることになるし、また味方自身をも、あざむくことになりかねない。フレイントはあくまで相手のスピードを変えさせる有効手段なのである。わかりきったパスをするよりは、そのパスのタイミングを早めるか、おくらせることで相手の意表をつく。ゴール前に近づけば、いつシュートされるかで相手バックの神経はギリギリとしぼられている。そこでいつでもシュートするような勢いでボールにかけよる。相手は思わず飛びこんでくる。すでに相手はフレイントにかかっているのだ。試合は互いに激しく動いている。だからかわっていてもひっかかる。それはおもしろいほどである。

香港に行ったとき、空港近くにあるグラウンドで、少なくとも10組の少年チームが入りまじってサッカーの試合をしているのを見た。驚いたことに、そのグラウンドはコンクリートでできていた。下は平たんなコンクリートであるから、ころぶともちろん痛い。そのう

ボールをはずませるな

かもしれない。まあこんなグラウンドはこころみはしないことにしよう。それにしても止めるのだけはうまい、と感心させられたのであつた。

ボールはボンボンとはずむ。はずむものを取り止めるのは、上から押さえるしか手がない。問題は押さえる足の方だ。軸足がフラフラし、押さえる足の方に体重がかかると、足のコントロールはきかないし、誤ればのめってボールを踏んづける。ボールが足の底から再びはずむばかりか、ころんで足首をねんざすることもある。重心はあくまで軸足におき、さっとボールのコースに入り、体の正面に迎える。立ち足はボールがバ

うんどする少し手前で「屋根型」にしてのばす。ヒザを軽く曲げ、足首に少し力を入れるだけで、ボールが勝手に足元に入りこんで止まってくれる。決して踏んづけようとしてはならない。自然の立ち方である。このフォームこそ、次の動作につながる構えである。

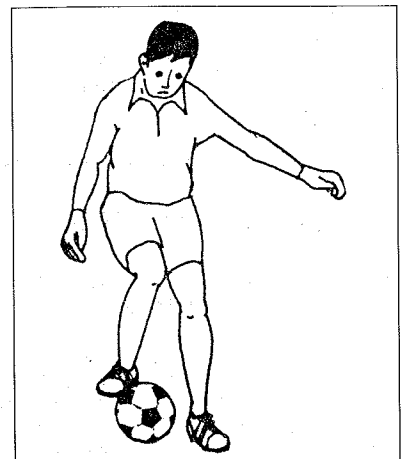
地上でバウンドする瞬間のタイミングのとらえ方、それは勝手に自分をつかんでいる。ただ最初から、止めそこなったら、はね上がって顔に当たるようなボールを練習させてはならない。一度顔に当たると、コースに立つことをこわがり、手前に軸足を置き、体をそらし、止める足を前にのぼして顔に当たるのを防ごうとばかりする。屋根型の足より軸足をどこにもつてくるかを教えるのが先決である。

よい試合はボールはほとんど空中高くバウンド

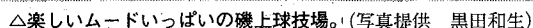
しない。だれかがいつもその下について取り押さえている。ゴムマリでもよい。テニスの古いボールでもよい。香港式に言えばアスファルトの道の上でもよい。ストップ練習の小道具はどこにでもころがっている。そしてボールは小さい方が上達する。よくはずむ方がよい。こんな足首、足底の感触は、子供のときにたたきこんでおくものだ。

この連載は故岩谷俊夫氏著の「サッカー教え方 学び方」(昭和42年 毎日新聞社発行)の内容をお送りしているものです。

足底ストップの2つのプレー。



市民2,000人が一同に
サッカーを楽しむ



また、昨年同様神戸市民生局施設からも中学生の部、小6以下初級、小4以下の部、小6以下女子の部に計19チームが参加し健闘した。障害施設の部では6チームが参加し、ハンディキャップを見事に克服した好プレーで大会を一層盛り上げた。

〒650 神戸市中央区八幡通2-1-10
三木記念神戸市立スポーツ会館内
神戸市サッカー協会 078-232-0753
なお、数人分まとめて申し込まれる場合は
割引がありますのでご連絡ください。

本店 中央区三宮町3-8-1 ☎078(391)1121
 ファイブ店 中央区三宮町2-7-8 ☎078(331)4578
 六甲、長田、白川台、名谷、西明石、高砂、姫路、岡山